

ヨハネによる福音書 20 章 11-18 節 「だれを捜しているか」

イースターおめでとうございます。主の復活を 2000 年以上も人々は信じ、宣べ伝えてきました。

今日記されているマグダラのマリアは、イエス・キリストの側にいることで、心の平安を抱いていた人物だと言えます。彼女はイエスさまによって癒された人物の一人です。イエスさまはマリアの体だけでなく、彼女の心を、すべてを救ってくださったのです。ですから彼女にとって、救い主イエス・キリストとは、自分の存在の確かさを証明する、まさにその方であったのです。マリアは、イエスさまの姿を自分の目で見ることによって、自分の確かさを確認したのです。その結果、ガリラヤからエルサレムへの旅にも、十字架のそばまでも付いて行きました。だからこそ、1 節の「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った」というのは、不安をかき消すように、目の見えるところに自分がいち早く行きたいという思いがあったからです。とにかく自分の存在の確かさを確認するために、いち早くイエス・キリストを見たかった、その思いだけで彼女は行動をしていたことでしょう。マリアは、泣いていました。15 節「婦人よ、なぜ泣いているのか」と聞かれても、彼女は気づきませんでした。マリアは、ここに至ってもなお、主イエスが伝えた福音を心から理解できず、目で見えるものだけに依り頼んでいたのです。マリアに対して、イエス・キリストは「だれを捜しているのか。」ともう一度質問を投げかけます。イエス・キリストの投げかけた質問「だれを捜しているのか」。これは私たちにも向けられています。不安を抱いているマリアや私たち自身に対して、イエス・キリストは一人一人の名前を呼んでくださっています。はじめは「婦人よ」だったその呼びかけが、次には「マリア」と名前を直接呼んでくださいました。マリアもイエス・キリストによって「マリア」と呼ばれた時に、初めて、「イエス・キリストの甦り」が理解できたのです。

私たちの生涯全体、人格全体、その人そのものが「甦りのキリストのもの」になることです。十字架と復活という出来事があるからこそ、今のわたしたちそのものがイエス・キリストのもの、命の御方のものになると、聖書は語るのです。名前を呼ばれるとは、そういう大きな深さを持ったことなのです。マリアの様に、はじめは個人的な信仰であっても、信仰の真理は、自分だけで得るのではなく、主イエス・キリストが、ひとり一人の名前を呼んで私たちを受け入れて下さったことを信じることです。マグダラのマリアはいずれ、この信仰と命の真理に気づいていったかと思えます。確かさを自分の手のうちに置くつもりが、実は神さまの確かさの中に置かれていたことに気づくのです。甦りとは、地上のわたしたちの知識だけでは、決して理解できるものではありません。神さまからの語りかけや問いかけがあって初めて、イエス・キリストの命や、神さまが今もなお生きておられることの意味が分かってくるのです。それは「神さまの御心が、今ここにある」ということです。明確に神さまの御心が生きてここにある。これがイエス・キリストの復活の中心なのです。神さまの御心そのものである主イエス・キリストが今ここに共におられ、そのキリストが、わたしたちひとり一人に「だれを捜しているのか」と問い、一人一人の名前を呼んでくださる。「あなたはわたしのものだ。わたしが本当の確かさで、あなたそのものを支え、わたしの命にも与らせてあげよう」そういう命にイエス・キリストは甦られ、今この礼拝を通してひとり一人に呼びかけておられるのであります。